

## 三浦貞宗と横須賀郷

三浦貞宗の本城は、三浦郡横須賀郷逸見村長峰（横須賀市緑が丘の諏訪神社の裏山）であろう。貞宗は、宝治の乱で生き残った庶流・佐原時連の孫（時連—宗明—貞宗—行連—範連）で、横須賀氏を称している。彼は、康暦元年（1379）三月、領内の諏訪神社に御正体を奉納している。応永十七年（1410）四月、三浦遠江守が、鹿島神社の大檀那として御神体を寄進しているが、この人は貞宗の孫範連であろう。貞宗の甥貞連は元応元年（1319）横須賀郷内に泊船庵（今の米海軍基地内）を建て高僧・夢窓疎石を住まわせている。（京急汐入駅下車）



御霊社の裏にある三浦義明の廟所（市指定）

「浄土宗寺院由緒書」によれば、この寺は文治五年（一一八九）二月、侍別当和田義盛が、源頼朝の祈願所として創建したとあり、鎌倉の勝長寿院を院号としているのは、その



県内で唯一の運慶作の阿弥陀三尊（国指定）鎌倉に運慶作の仏像が残されていない中において貴重。

本尊は阿弥陀三尊。中尊の阿弥陀像は、彫眼で来迎印を結ぶ、結跏趺坐のお姿である。

### 浄楽寺（浄土宗）

◆ JR横須賀駅または京急新逗子駅 ◆ バス停浄楽寺 ◆ 浄楽寺 ◆ 芦名城址 ◆ 十二所神社

## 2 横須賀市内コース②



ためである。源頼朝の後室<sup>ごうしゆ</sup>二位尼北条政子が承久二年（一二二〇）二月に奉納したという銘がある懸仏<sup>かけぼつ</sup>を蔵すが、仏像（室町期作か）と鏡面（近世の作）は、別物である。三浦郡内には東昌寺、光念寺、正観寺、往生院、西来寺、無量寺など七阿弥陀を伝え、浄楽寺は、その第二といわれるが、定かではない。

不動明王・毘沙門天の両像は、水晶を嵌め込んだ玉眼で、玉眼の仏像としては関東では最も古い。特に毘沙門天は、剛士を連想させるもので、このような写実性に満ちた豪快な運慶の作風を、関東武士は好んだのである。阿弥陀三尊、不動明王、毘沙門天の五体とも、すべて檜の寄木造りである。

この毘沙門天の体内から、和田義盛、小野氏夫妻が願主となって文治五年三月、奈良興福寺相応院の勾当運慶と、仏師十人に造立させた旨を示す月輪形の銘札が昭和三十四年に発見され、次いで同四十五年、不動明王の体内からも発見され、これらの書体が、阿弥陀三尊の体内に墨書された宝篋印陀羅尼<sup>ほうけついんだらに</sup>と同一であることから、この五体は運慶作と断定された。

頼朝が鎌倉入りし、初めて勝長寿院という寺を建てた

のは文治元年。同五年、頼朝の舅北条時政が、伊豆荊山に願成就院を創建し運慶作の仏像を納め、この年、和田義盛もまた運慶に仏像を造らせ、ここ浄楽寺に納めたのである。奥州征伐の出陣が文治五年七月であり、浄楽寺の仏像の造立がその四か月前であることを思うとき、この像は、和田義盛夫妻が、お家の安泰と奥州征伐の成功を願って造立したものと推測させるのである。

### 芦名城址

大楠小学校正門前の城山じょうやまといわれる南北に長い岩山が、芦名城址である。三浦大介義明の弟・葦名為清が築いたとされ、御館みだちと呼ぶ大楠小学校辺りが館跡と伝える。芦名は、『吾妻鏡』には「葦名」と書かれ、戦国期は蘆名と書かれ、芦名と書くようになったのは、江戸期以降である。明治末期、城山の南側が建築用材として採石され、原形は留めていないが、西側に海が開けた馬蹄形ばていけいで、南側に流れる芦名川が堀の役割を果たしたようで、上流に「カライケ」、堀に橋を架けたと思われる「ハシド」という小名こなが残されている。

葦名城は、為清の子葦名為長が継承したが、奥州合戦



芦名城址（今は私有地）

の後、三浦義明の子佐原義連よしろの預かりとなり、その子盛連に譲られたとみられる。それは、為長の子が木曾姓を称していること、義連が葦名のこと、義連が葦名の三浦十二天神に頼朝室の安産祈願を命ぜられていたこと（次

頁参照）、子盛連が葦名に住み名を称していること（系図纂要）などからである。盛連は、執権北条泰時の妻室であった三浦義村の娘（のちの矢部禅尼）と再婚し、悪遠江守あくとほしやのみと称され、公家の間でも知られた存在であった。葦名郷は、遠江守光盛からその子伯耆守護経光へと相伝されたが、経光の子は継がず、経光の弟泰盛からその子盛宗に譲られたようである。この盛宗こそ『蒙古襲来絵詞』の中にみえる、恩賞奉行の安達泰盛に侍る葦名判官あしがんである。

葦名氏は、盛宗の孫直盛のとき、会津に黒川城（会津若松市・のちの鶴ヶ城）を築き、そこに本拠を移したよ

三浦義村―矢部禅尼



うで、葦名郷は、直盛の孫盛政の時代には山口郷、鎌倉屋地の大倉釈迦堂ヶ谷、亀ヶ谷切通しの所領とともに不知行の状態となっている。

さて、長享元年（一四八七）二月だと思うが、下総千葉氏の一族で二条流歌人の東堯恵という僧が、新井城主の三浦義同を頼り、ここ葦名村に東常和を訪ね、およそ四か月間、過ごしている。三浦義同は、常和の父常縁から古今伝授を受けた歌人でもある。堯恵は葦名村に滞在中、鎌倉の旧跡や金沢称名寺などを訪ね歩き、『北国紀行』に綴っているが、その中に、葦名村の情景を詠んだ和歌がある。

なにはなる あしなはきけとかけもみす

三浦か崎の なみの下草

### 十二所神社

創建時期は不明だが、三浦氏が、氏神の三浦十二天神

### 津久井氏の五輪塔

（東光寺）



津久井城址は、真言宗東光寺の向かいの峰屋敷と呼ぶ小山である。三浦大介義明の弟津久井義行が築城し、高行―義道―高重と相伝され、高重のとき、承久の乱で京側に与し滅びている。東光寺には、義行の碑と一族の五輪塔がある。（京急津久井浜駅下車）

を葦名郷の鎮守として勧請したと伝え、七天神、五地神の十二神を祀る。隣地の淡島神社も、同じ頃の創建らしい。寿永元年（一一八二）八月、この三浦十二天に、佐原義連が、源頼朝の妻室北条政子の安産祈願の奉幣使を命ぜられたことが、『吾妻鏡』にみえる。明治初期、十二所神社と改称されている。